

## P-021

### 発達支援としての音楽療育の実践における音・リズム

立本 千寿子<sup>1</sup>、坂根 ここの<sup>2</sup>、中野 美咲<sup>3</sup>、  
吉田 翔<sup>4</sup>

<sup>1</sup> 兵庫大学

<sup>2</sup> 福知山市 (保育)

<sup>3</sup> 君津郡市 (保育)

<sup>4</sup> 中央認定こども園

#### 【目的】

音楽が生理的・心理的に寄与する有効性を利用した一つに音楽療育がある。音楽療育は、児童発達支援センターや特別支援学校、医療現場等において実践され、その有効性や実践性の高さから、発達支援のアプローチとしての方法論として機能している面が高い。しかし、その一方で、幼児への音楽療育ではメロディー（旋律）のある音楽が用いられることも多く、音楽の構成要素である音・リズムの意義が十分に理解され活用されているとは言い難い。そこで本研究では、発達支援としての音楽療育における音・リズムの意義について実践を通して検討することを目的とする。

#### 【方法】

通園型発達支援センターにおいて、全 20 回の音楽療育の実践を行った。研究参加児は、本センターに通園する主に ASD（自閉スペクトラム症）の診断を受けている発達障害の幼児やダウン症候群の幼児であった。音楽療育の形態としては、3 歳児クラス・4 歳児クラス・5 歳児クラスのクラスにおいて、発達特性による集中できる時間を鑑みて約 10 分ずつのセッション案を考案し実践した。セッション内容は、季節ごとの行事や幼児の姿などを考慮して考案し、同じ年齢である小集団の中でも発達の差が大きい点に配慮した。

#### 【結果】

本研究の音楽療育の実践内容において、特に音・リズムをアプローチに用いた内容を抽出し、それらの内容について、実践者であった 4 名で発達支援としての音楽療育において、音・リズムの意義があると考えられる実践内容の観点を検討した。その結果、以下の 5 点が抽出された。

(1) 絵本の世界から言葉の音・リズムを感じる。(2) 民族楽器や弦楽器の珍しい音・リズムに興味を広げる。(3) 自然物の優しい音・リズムに耳を傾ける。(4) 音・リズムを感覚統合に用いる。(5) 行動の正の強化として音・リズムを効果音に活用する。

#### 【考察】

音楽は非言語であるが故に言語発達が未熟な幼児にとっても直接情動に働きかけることが可能であり、活動に柔軟に取り入れることができる。本研究の実践と結果から、特に音・リズムは、幼児のイメージを限局することなく、実践の幅を広げることが可能であると考察される。また、音楽技能に限局しないことから親しみやすく、安心して他者と繋がることを可能にしやすいと考えられる。そして、メロディー（旋律）がないことで自由度が増すため、縛りなく安心して表現できる空間が実現すると考察される。

## P-022

### 母子健康手帳における発育曲線の表し方に対する保護者の受け止めに関する研究

田口 美穂子<sup>1</sup>、加藤 則子<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 十文字学園女子大学大学院人間生活学研究所

<sup>2</sup> 十文字学園女子大学教育人文学部幼児教育学科

#### 【背景と目的】

妊娠届け出時に交付される母子健康手帳には、乳幼児の発育の目安であるグラフが記載されており、体重、身長、頭囲について、3 パーセントから 97 パーセントまでが帯で示されている。現状では、健常な成長をたどっているにもかかわらず計測値がこの帯の中に入らない場合が数パーセントの例で存在し、特に小さい場合に不安の原因になる。子どもの成長には個人差があり、一人一人の個性を重視しつつ継続的に観察する必要がある、計測値が標準範囲内であるかどうかのみにこだわるのは好ましくないという議論はかねてからされている。こういった不安を多少なりとも解消できるようなグラフの表し方を試作し、保護者にとって使いやすく支援者にとってもより良い目安の表し方に生かし、有益なツールの提供につなげることが出来ることを目的とした。

#### 【対象と方法】

首都圏にある私立保育園、子育て支援を行う助産院等に協力を依頼し、利用中の保護者 51 名（第 1 子の年齢において 2 歳までが 49.0%、3 歳以上が 51.0%）に対し、グラフ表現の受け止め方の 7 段階評価と、グラフ表現を見てのあてはまる気持ちと複数回答で選択する質問票を元にアンケートとインタビュー調査を行った。

#### 【結果】

現行の母子健康手帳で用いられている既存グラフと統計的な信頼区間に応じてグラデーションをかけた表現のサンプルグラフに対し、7 段階のフェイスマークを使用したアンケート結果において、好ましい方から 3 つ目までを選択した者が 44.0% 及び 60.0% と既存グラフよりもサンプルグラフであるグラデーションの表現が好評であった。自身の子の発育には心配がないと回答した保護者からも「グラフからはみ出てしまった保護者は気にしてしまうのではないだろうか」といった心配の声も多く見られた。また支援者の説明次第でグラフ表現よりもむしろ保護者の受け止め方が変わってこともわかった。

#### 【考察】

自身の子がやや大きめ・小さめの体格で推移する保護者には、境界を鮮明にしない表し方が好まれる他、支援者の説明の仕方や言葉使いが強く影響していることが判明した。また今回の対象者の支援者側からも同じような声が上がっており、支援者のコミュニケーション力が重要であることが判明した。発育の異常の見落としを避ける必要もあるため、現場の支援者側では、より正確な発育評価が可能な保健指導用グラフの併用も考えられる。